中勘助の「銀の匙」から『提婆達多』に至る救済の思想

The idea of Salvation in Naka Kansuke's Works: From "Gin-no-saji" to Devadatta

木内英実
Hidemi Kiuchi

要旨：
中勘助の大正期の作品「銀の匙」と『提婆達多』に表れた救済の思想において、「銀の匙」後篇が書かれた比叡山恵心堂滞在期の影響を探ったもの。文献調査、伝記的事項調査の結果、天台宗門下の「朝題目夕念仏」の信仰の姿や源信が著した『往生要集』における地獄の描写及び極楽往生の方便が描かれていることが判明した。また悉達多の原始仏教教義と対照的に提婆達多の思想は近代的、ダンテの『神曲』の影響下のキリスト教学的であり、『提婆達多』が近代人の問題を描いた作品として位置づけられる要因となっていることが分かる。

キーワード：中勘助　「銀の匙」　『提婆達多』　源信（恵心僧都）　『往生要集』

一．はじめに

中勘助の『提婆達多』の初版は大正一〇年五月一日新潮社版であり、脱稿日は大正九年四月一七日と稿末に記されている。実際は、大正一〇年五月四日付和辻照子宛書簡にて「『提婆達多』は多分来月十日頃にならうかと思います」と六月十日ごろの出版であったことが推測される。「著想は『銀の匙』と同じ頃かと思ふが古い事で記憶に自信がない。著筆は『銀の匙』発表の後である」と角川書店版『中勘助全集』第二巻「あとがき」において中が記すように、「銀の匙」後篇脱稿（大正三年一〇月）から約六年経過後、満を持して発表された作品である。

本稿において、次章の先行研究から解明された、作品末尾の提婆達多の「苦しい長い一生をおえた」臨終場面に伴う「もしそこに我々に救があるならば、提婆達多こそはまことに救われるであろう。提婆達多が救われずば、我々の誰が救われるであろうか」という救済のテーマに関し、「銀の匙」後篇執筆時における源信（恵心僧都）の思想から、『提婆達多』における原始仏教思想への展開を論じる。

二、先行研究から導き出された諸点

（一）先行研究一覧

先行研究として提婆達多の「苦しみ」と「救済」に言及したものを次に挙げる。

①和辻哲郎「『提婆達多』の作者に」『読売新聞』大正一〇年六月二一～二三日掲載

「提婆達多を自分の心によって内から照らし」たことで、「提婆達多の――我々と同じ増上慢心の持ち主の――苦しみの深さを明らかにした」と描写の視点を評価し、提婆達多の「仏陀に打ち克とうとする心」が「悲劇的な没落に導く」ことを指摘した。

②小宮豊隆「解説」角川文庫版『菩提樹の蔭・提婆達多』昭和二七年三月三〇日

提婆達多の救いは「耶輸陀羅に対する変化によって示唆されている」奇跡と言うべきものであり「奇跡というものが元来外から来るものではなく、実は内から来るものである以上、提婆達多の救いの可能性は、既に提婆達多の内に含まれていた」と論じた。後半の阿闍多設咄路の挿話についても「我から解放され、更に悉達多に帰依することによって、真の救の道に足を踏み入れる」と内面からの救いに言及した。

③小宮豊隆「中勘助の作品」『中勘助　内田百閒集』筑摩書房　昭和三一年六月二五日

「人間固有の『嫉妬』もしくは『我』」が「観察」された作品であり、これは「中のなかの『嫉妬』、中のなかの『我』、或は中のなかの『煩悩』、中のなかの『地獄』を、覆い隠すところなく、赤裸々に告白しようとしたものである」「中が、中を含めた我々のなかに提婆達多が住んでいることを、深刻に反省している」と、提婆達多と作者を始めとする普遍的人間の内面との近似を示した。作品が人間存在にとっての「地獄」即ち提婆達多にとっての「地獄」を描いていると指摘した点が②に加えて新しい。

④河盛好蔵「解説　中勘助集」『中勘助　内田百閒集』筑摩書房　昭和三一年六月二五日

②の小宮説を継承する。

⑤関口宗念「『銀の匙』におけるペシミズム」関口宗念　『聖和』二号　昭和三二年九月、「『提婆達多』における悪」『聖和』三号　昭和三六年一一月、『「仏陀の慈悲」―中勘助と仏教』『聖和』四号　昭和三八年一二月（『中勘助研究』創栄出版　平成一六年五月一〇日に収録された。）

「銀の匙」で「心ゆくまで追懐」した後に、「次の作品『提婆達多』『犬』に於て、本格的フィクションの中に、人間の『地獄』や『生活』を追求して行く」と、「銀の匙」と「提婆達多」のテーマの相違を浮き彫りにしている。「デーバダッタ」を通じて描かれた「人間悪の縮図」「地獄図絵」を描き出していると指摘した。また中が「原始仏教説話」をもとに「提婆達多」を創作しながらも嫂の影響下、「浄土門に関する知識の豊富さ」を「みちをしへ」の詩文に発見した。

⑥藤原久八「『提婆達多』考」「『提婆達多』の主題」『中勘助の文学と境涯』金喜書店　昭和三八年五月三〇日

「銀の匙」が「漂う美の情緒の世界」を描いたのに対し『提婆達多』は前篇に「醜悪たる嫉妬心」、後篇に「人間の性欲」を主題として

おいた「人間のなかの醜悪なるもの」を描いた作品として位置付けた。『提婆達多』の末文を中勘助の「悲願」とし、提婆の「生きながらの救い」は耶輸陀羅との恋にあったとする②の小宮説を踏んだもの。

⑦山室静「中勘助の世界」『法政』一五七号　昭和四〇年

「『銀の匙』だけでは中勘助を理解するのは不十分で、少なくとも『提婆達多』と『犬』を読まなくてはならない」と述べた上で、『提婆達多』と『犬』二作の共通点として、「愛欲の妄執の深さ、女をめぐる嫉妬の生む迷いと狂乱の救いがたさ、そして憐れさ」という主題を挙げる。これらの主題の背景にある、当時の中が抱えていた義姉との関係に言及した。

⑧奥山和子「『提婆達多』考―卒論ノート抜粋」『静岡女子大学　国文研究』創刊号　昭和四三年六月（日本女子大学国文学科に昭和四二年に提出した卒論をもとにした論考。昭和四四年頃私家版『中勘助の思想』「（四）提婆達多」「（八）三作における救い」に収録された。）

バラモン教・原始仏教における「救い」を「輪廻よりの解脱」とした上で、『提婆達多』登場人物それぞれの「救い」について論じた。提婆達多の「救い」に関して「愛憎の苦悩の中の覚醒に人間の成長を見ることで、その人間の生き方を肯定したのが、救いである」と述べ、「彼は籟に崩れた者がもとの姿にこがれるやうに出来るならばこの苦しい記憶を忘却の海に投じて今一度清浄無垢な提婆達多として生れかへつてきたいとねがった」という自己中心的な性格が悲劇の根源であるとした点では①の和辻説を継ぐ。

⑨渡辺外喜三郎「小説から童話へ　『提婆達多』」「『提婆達多』をめぐって」『中勘助の文学』桜楓社　昭和四六年一〇月二〇日

『提婆達多』を「人間のこころの暗黒部分」と位置づけ、「嫉妬のあくなき狂乱」を主題と指摘した。嫂への恋情と道徳のはざまで苦悩する中像を提婆達多に投影し、「希求憧憬の『銀の匙』の時代は過ぎ、自ら求めて求め得ざる愛と平和の禍根を自己のなかに見出した」とする。また先述した①～⑦の先行論文の改題を行った。本論では取り上げなかったが、嘉村礒多の安倍能成宛書簡（『嘉村礒多全集』下巻　南雲堂桜楓社　昭和四〇年九月二五日　収録）における、嘉村の『提婆達多』に対する不満を、絶対帰依の仏陀を信仰する立場ならではのものと先行論の一つとして挙げた。

⑩荒松雄「解説」岩波文庫版『提婆達多』昭和六〇年四月一六日

荒はインド・イスラム史家。愛憎共存の微妙な人間感情を「仏教興起時代の異国の人物に仮託して」作者を代表とする普遍的な人間の愛憎の境地を描いたと③の小宮説を継ぐ。

⑪三好行雄「中勘助・人と作品」『昭和文学全集』第七巻　小学館　平成元年五月一日

「悉達多はついに耶輸陀羅を救えなかった」ことから、「中勘助の描く悉達多はむしろ無力においてきわだち、提婆達多の破滅は救済を拒む人間の無明を髣髴する」と看破した。末尾の表現に関しても「ひとの説くほど重くは響かない」と否定的である。

⑫川路重之「中野新井町」岩波書店版『中勘助全集』月報三　平成元年一一月

作品末尾の悪人正機的解釈（「提婆達多は悪人である。もし彼が救われないならば、他にも仏性から遠いゆえに救われない人々が残るだろう。それでは仏陀の慈悲に限りがあることになる。それゆえ

提婆達多こそ救われなくてはならない）を中に尋ねたところ、「そうではありません。あれは、あのまま読まなくてはいけないのです」と回答があったことを記した。「耶輸陀羅への『愛』ゆえに」「光明への希求ゆえ」と、提婆達多が救われる理由に言及する。

作品の典拠や他作家への影響に関する論について以下に挙げる。

⑬堀部功夫「『提婆達多』の参考書」岩波書店版『中勘助全集』月報三　平成元年一一月

仏書『仏弟子伝』（山辺習学　無我山房　大正二年四月）とその原拠漢訳経典「増壱阿含経」、『美術上の釈迦』（堀謙徳　博文館　明治四三年九月）とその原拠漢訳経典「本行集経」と本文（後編五と前編三十、そして新潮社版単行本表紙カバー写真）との影響関係を論じた。

⑭平山城児「中勘助『提婆達多』」『国文学　解釈と鑑賞』五五巻一二号　平成二年一二月

典拠となった仏典、⑪で示された『仏弟子伝』等の借用、引用部分と創作部分を指摘した論。五分律、未生兎経、観無量寿経を『提婆達多』後篇阿闍多設咄路物語の典拠と位置付けた。

⑮市川浩昭「中勘助『提婆達多』とシェイクスピア『オセロ』」『上智大学国文学論集』三九巻　平成一八年一月八日

和辻が評価した「仏典上の悪人を我執に囚われた人間として再構築した」『提婆達多』の描写と造形の手法に注目し、中が漱石を通じて受容したシェイクスピアの「オセロ」における「イアゴーとオセロの嫉妬の性質」として「自分にないものに対するねたみ」「自身が所有するものを失くしたり、奪われたりすることへの恨みと怒り」の二種を挙げ、『提婆達多』における「嫉妬に囚われた主人公の造型」への影響の可能性を探ったもの。

「嫉妬に囚われた人間の地獄絵図」という主題理解は同氏による「中勘助の嫉妬観」『国文学』平成二〇年六月号に引き継がれていく。

⑯工藤哲夫「土神と狐の物語」『女子大国文』一三六号　京都女子大学国文学会　平成一六年一二月三〇日

宮沢賢治の作品における『提婆達多』の影響を論じた。

⑰木内英実「中勘助の『提婆達多』における仏伝」『密教美術と歴史文化』真鍋俊照編　平成二三年五月一〇日

⑫⑬の論を再考し、新潮社版単行本表紙カバー写真をT.W.Rhys Davids のBuddhist Indiaに典拠し、本文中の地名フリガナに同書英語表記の地名の音が採択されていることを指摘した。また和辻が評価した耶輸陀羅の描写に着目し、手沢本の書入れ箇所との照合により作者が耶輸陀羅の心理描写に苦心していたことを解明した。また仏陀・耶輸陀羅・提婆達多の三角関係を描いた二〇世紀初頭のドイツ戯曲と本作との相違点を示した。悪念が停止する「死」が提婆達多にとって「救い」となる「救い」の多様性について言及した。

（二）考察

①先行研究の大部分が「銀の匙」と『提婆達多』は趣の異なる対照的な作品として位置付けており、救済のテーマについて「銀の匙」から『提婆達多』への連続性や発展性を示した論を発見することはできなかった。

②（一）⑤の関口論において中による原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解が指摘されたが、具体的な思想並びに源信（恵心僧都）の思想受容についての言及を認めることができなかった。

③（一）③⑤⑮の論が述べる提婆達多の「地獄」について、中の思想における「地獄」のイメージとの対照を認めることができなかった。

以上を研究の観点とし、中の経験や受容した思想について文献研究を中心に論じていく。

三、比叡山横川の恵心堂における中と安倍能成の体験

（一）「往生要集」偈文

先述したとおり。本作が構想されたのは「『銀の匙』と同じ頃で[註1]「上野の山内にいる間に天台宗大学の蔵経を借りたりして準備」したという。「銀の匙」後篇が、中が上野寛永寺山内真如院にいた頃、「同宿の坊さんから山内の他の坊さんに伝はり（中略）話が都合よくすすんで横川の恵心堂においてもらふことにきまった」という経過の中で、大正三年の夏「数十日」を過ごした横川の恵心堂で書かれたことは「水尾寂暁師と三千院」「鶴林寺」等、京阪見学の感想に併せて当時、横川で交流を持った水尾寂暁師、渋谷慈鎧師を回顧する「古国の詩」に詳しい。ちなみに横川の恵心堂は[註2]「円融天皇の永観元年に摂政太政大臣兼家公が慈恵大師のために創建」し、「恵心僧都が念仏三昧を修し給うふた旧蹟」と『比叡山史の研究』に記される。

その際、中が安倍能成と同行していたことは安倍による中逝去の際の[註3]追悼文「中勘助の死」に詳しい。そこには「大正三年、叡山横川の恵心堂に同居した時、私の畳を掃くのを見て、彼が『どんなに僕に気に入られようと思つたつてだめだよ』といった詞に対しては、私は実に生意気野郎だと思つて、怒り心頭に発したことがある」とあり、いつも円満だったとは言い難い滞在の様子が伺える。

しかしその際、山寺で二人の印象に残ったものは二人の作品から、共通する事が分かる。

[註4]「鶴林寺」に収録された中の詩「みちをしへ」を次に記す。

みちをしへ

若い日の思い出はうらさびしくまたほほゑましい
わたしはなにもかも思い棄てうつろの胸を抱いてさまよひあるいた
霧まよふ横川の路
そのときいづくともなくひとりの童女
目もあやな花ずり衣きて
さきにたつてふりかへり
さきにたつてふりかへり
さすがに人なつかしくついてゆく私を
とある御堂にみちびいて姿をけした
目のまへに立つ石ぶみ
極重悪人無他方便
唯称弥陀得生極楽
それから四十年
美しいみちをしへよ
おまへはどこへいつた

安倍能成の[註5]「山中雑記」における恵心堂に関連した箇所を次に記す。

恵心院門前の石に、「極重悪人、無他方便、唯称念仏、得生極楽」の十六文字を濃くしてある。その何経にあるのかは私は知らないが、有難い詞だとは前から思って居た。しかし私は思う。極重悪人をして能く極楽に生るるを得せしめるこの唯称念仏の心は、非常に深重なものでなければならない。「善人尚もて往生す、況んや悪人をや」という歎異抄の詞を、前後のコンテキストを離れて、今ここに私一人で考えて見ると、悪人の往生し得る力は、悪人の悪が罪悪の自覚を一層深重ならしめるのによるのではないか。深重さる罪悪の自覚は即ち救済である。これ蓋し厳粛なる否定がやがてその超越たる所以である。唯称念仏の心はやがて深重なる罪悪の自覚でなければならない。もしこの自覚を外にして、徒らに極楽を好餌として往生を説くならば、それはもう宗教の堕落である。私はかくの如き人心の弱点に乗じて、その結果はむしろ罪悪の奨励となる如き宗教の弘通を呪はざるを得ない。恵心僧都の真精神は固よりかくの如きものではあるまい。親鸞聖人の精神も亦。

盆の十五日に岳麓の来迎寺へ宝物を見に行つた。中に巨勢金岡の筆と伝へられる十界の図がある。絵は随分旨いものである。筆力も中々ある。しかし私はこれを見て何等の宗教的情熱を触発されなかつた。唯一種の気味悪き不快（尤も真筆は四幅見ただけであつて、後は写しであつた。中に「畜生道」の図の如きはむしろ軽快なものである）を感じただけである。この絵は恵心僧都の『往生要集』によつて描かれたものだときいて、寺へ帰つてその書物を借りて少し読みかけたけれども、四、五枚も読むうちに唯不快ばかりを感じて止めてしまつた。後にその事を或友人に話した時に、彼は「往生要集の地獄は寄せ集め物である上に、感覚描写があるばかりで、一つもポエトリーがない。ダンテの地獄などとその点が違ふ」といつた。私はそれを聞いて成程さうもあらうかと思つた。大正七年八月の脱稿年月記載有　初出『思潮』二巻一〇号　大正七年一〇月一日）

中が安倍の文章を読んでいたことは、「山中雑記」掲載『思潮』同号に奈良国立博物館で中と出会ったことを記した「古寺巡礼」を和辻哲郎が連載していたことから明らかである。同号の「古寺巡礼」冒頭には、「博物館を午前中に見てしまおうなどというのは無理な話である。一度にせいぜい二体か三体ぐらい、それも静かに堕ちついた心持ちで、胸の奥に沁み込むまでながめたい。N君はそれをやつているらしい。入り口でバッタリ逢った時に、N君はもう見おえて帰るところだった」と、[註6]N君として中が登場する。

［写真1］　恵心堂門前の石柱（全体）
平成26年10月12日筆者撮影

［写真2］　恵心堂門前の石柱
（下部分アップ「極重悪人　無他方便
唯称弥陀　得生極楽」）

『比叡山諸堂史の研究』（武覚超著法蔵館　平成二〇年三月一六日）によると中が滞在した恵心堂は昭和四〇年に焼失し現在の堂宇は山麓坂本の生源寺横にあった別当大師堂を移築したものであるという。平成二七年一月二九日付比叡山延暦寺水尾寂芳師の書簡によると［写真1・2］の「石柱の裏面には、旹明治十八年乙酉中秋とあるようです。（中略）昭和30年代、恵心院は横川中堂（昭和17年焼失）の仮堂とされ、現在の清原大僧正が輪番として勤めたことがあるとのことで、大僧正からも、この石柱は焼失以前の恵心堂前に在ったと仰っていました。」と、［写真1・2］の石柱が中と安倍が見たものと同一とのご教示を得た。

写真1・2の通り、恵心堂門前の石柱に刻まれた法語は正しくは中の著による「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」であった。「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」は、源信が永観二年から寛和元年にかけて撰述した『往生要集』（西教寺本）大文第八「念仏証拠門」の偈文である。一般的な『往生要集』（岩波書店『日本思想体系六　源信』昭和四五年九月二五日）には「四観経（云）、極重悪人無他方便、唯称念仏得生極楽」と記され、安倍が記した「極重悪人無他方便、唯称念仏得生極楽」と同じである。書き下し文は「極重の悪人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極楽に生ずることを得。」として知られる。同書の石田瑞磨による校注には「この文は観無量寿経、下下品（正蔵一二ノ三四六上）の取意と見られる。」とある。

観無量寿経、下下品（岩波文庫版『浄土三部経（下）』中村元・早島鏡正・紀野一義訳昭和三九年九月一六日）には「仏告阿難及韋提希、下品下生者、或有衆生、作不善業、五逆十悪、具諸不善。如此愚人、以悪行故、応堕悪道、経歴多劫、受苦無窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識、種種安慰、為説妙法、教令念仏。此人苦逼、不遑念仏。善友告言、汝若不能念者、応称無量寿仏。如是至心、令声不絶、具足十念、称南無阿弥陀仏。称仏名故、於念念中、除八十億劫、生死之罪、命終之時、見金蓮華、猶如日輪、住其人前。如一念頃、即得往生、極楽世界、於蓮華中、満十二大劫、蓮華方開。観世音大勢至、以大悲音声、為其広説、諸法実相、除滅罪法。聞已歓喜、応時即発、菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生想、名第十六観。」とある。

早島による漢文和訳は以下の通りである。

仏はアーナンダとヴァイデーヒーに告げられた。――「〈下品下生の者〉とは、生ける者どもの中で、不善な行為である五逆罪と十種の悪行を犯し、（その他）さまざまな不善を行ない、このような悪しき行為の結果、悪しき道に堕ち、長い間くり返しくり返し苦悩を受けて止むことのない愚かな者のことであ

る。このような愚かな者の命が終ろうとするとき、この者を種々に慰め励まし、この者のためにすぐれた教法を説き教え、仏を念じさせる指導者に遇う。そこで指導者が言うのに、『お前がもし仏を念ずることができないのなら、無量寿仏よ、と称えなさい。』と。このようにしてこの者は心から、声を絶やさぬようにし、十念を具えて、南無アミタ仏と称える。仏の名を称えるのであるから、一念一念と称える中に、八十億劫の間かれを生と死に結びつける罪から免れるのだ。命の終るとき、日輪に似た黄金の蓮華がかれの眼の前にあらわれ、一瞬のうちに〈幸あるところ〉という世界に生まれる。蓮花の中にあること十二大劫を過ぎて蓮花は花開く。アヴァローキテーシヴァラとマハースターマプラープタは、大悲の音声でこの者のために広く存在の実相と罪を除き滅ぼす法を説く。この者は聞き終って歓喜し、たちまち覚りに向かう心をおこすのだ。これを〈下品下生の者〉と名づけ、これを〈下位の者の往生の観想〉（下輩生想）と名づけ、〈第十六の冥想〉と名づけるのだ。」と。

二（一）⑭の平山論で紹介されたように観無量寿経は『提婆達多』後篇の阿闍多設咄路王の話の典拠であり、中自身も初版本の末尾に参考諸書の一つとして掲載している。

（二）山田又吉追善

大正三年夏期の中の恵心院滞在には一つの理由があった。

「叡山恵心堂」（註7『我が生ひ立ち　自叙伝』収録）には安倍による「その前年友人山田又吉が、私の留守宅で自殺したが、二人して叡山に居た　に、大阪市中の山田の家を一緒に尋ねたことがある。（中略）山田は中をラヴして居たと思ふが、中の本質の善い所は、私などよりよく見て居たらしい。山田の死んだことは中にとつては大きな打撃であつたろう」と、大正二年三月二九日に自殺し、中が後始末に奔走した山田又吉の実家に弔問に行ったとの記録がある。

中、安倍、岩波茂雄が編集し大正五年三月二九日に岩波書店から上梓された『山田又吉遺稿』収録「山田又吉年譜」によると山田は、明治一六年三月九日大阪市生まれ、同三五年第一高等学校第一部入学、同三八年九月病に罹り休学、同三九年末、復学、同四〇年七月東京大学文科大学哲学科入学、西洋哲学を修し同四三年卒業、大正二年三月二九日逝去という経歴をもつ。山田の逝去は安倍の前掲書によると「古い大きなナイフで首筋を切り」という自殺であった。

山田の大正元年一二月一二日付岩波宛書簡には「かつて愛静館を出て君の家へ行つたあの数日間の怖ろしかつた事を思ひ出すと今は大変幸福で居る、あの時は昼間日光が怖ろしくて戸をあけ得なかつた。然し今は生きようとの覚悟を少くとも予期して居る」と、自殺の兆候が窺える。

また大正元年日付不明（一〇月三日～一二月一二日）安倍宛書簡では、八月に中が大内生の署名で『新小説』に発表した「夢日記」に関し、「中の夢日記は誰れか評をした人があつたが、面白い評をした人でもあつたか」と、世間の反応を尋ねている。

当時は大正二年四月八日からの『東京朝日新聞』に「銀の匙」（前篇）連載開始直前であった。「岩波と山田の骨をもつて大阪へいつてからもう三十年にもなる」と昭和二〇年四月二六日付随筆「羽鳥」で回顧する中であったが、その後始末を含め安倍の推測通り

「山田は中をラヴして居たと思ふが、中の本質の善い所は、私などよりよく見て居たらしい」と評される親友を失ったことは「大きな打撃」であったと考えられる。

山田が明治三四年四月に提出した卒業論文（英文）は同書（『山田又吉遺稿』）に「エックハルト研究」（中勘助・久保勉・安倍能成翻訳）として収録されている。「第一章　神性」「第二章　三一神」「第三章　創造」「第四章　被造物」「第五章　心理学」「第六章　人間の自由」「第七章　徳」「第八章　生誕と神化」「第九章　人生の理想的状態」という構成であり、卒論指導者のラファエル・フォン・ケーベルのコメントが付され、末尾に「君のこの論述は極めて根本的でそしてよい。然し今後君がこれを更に役に立たせようと思へば、余は君にその内在的に偏する點を改めることを薦めたい。即ちエックハルトと彼に似た人々との関係をも示すといふことである。換言すれば君の論文を歴史的―哲学的なモノグラフィーに形作るやうに試み給へ。」という総評も記されている。論文題名と論文構成から理解されるように、中世ドイツの神学者・神秘家であるエックハルトの思想を検証した論文である。

「第九章　人生の理想的状態」において「生誕」即ち「遠離は我々の空虚を生じ、魂の本質はこの空虚へ現はれる」「殆ど肉体の死」である状況下で、「内面的業が全く、神の業になり、外面的業が毫も人間の努力を要せぬ」ことを、「霊の向上」「徳の道」に努めることによって繰り返すというエックハルトの思想を引用し、最後に次のようにまとめた。「我々が大苦の中にあつて恩寵の助を要する時に、其本質に於て永遠だけれどもこの現象界に於ては束の間なるところの生誕が起る。かくの如きは人生の果しなき道である。」

中村元は『中世思想　上』（春秋社　昭和五一年七月）において「最も深く最も真実なる真理」を「一般民衆に伝達しようと」ゲルマンのことばで記したエックハルトの業績にふれ、民衆に分かるよう和語で著作をなした鎌倉仏教の創始者との近似性や、「神は何物でもなく『無』であるという」思想を紹介している。

山田も卒論の中で「本質の有様について考えることは、彼に於てはそのままに道徳的行為であつた。例へば仏陀の教理の中に屢ば見受くる様に、無宇宙論的の言葉はエックハルトが現象世界に対して強く憎悪を抱いて居ることの証拠である。」（「第二章　三一神」）と、エックハルト思想と仏教思想を比較した。

（三）静岡市中勘助関係資料内の天台宗関係資料

二（一）⑧の奥山による「中夫人の話によれば、資料の一つに大蔵経があるという事である」を裏付けるように、静岡市が中勘助遺族より寄贈を受け管理保管する静岡市中勘助関係資料内の蔵書には、東京弘教書院大日本校訂大蔵経（資料番号098A001～003 099A001～003 100A001～003 101A001～003 102A001～003 103A001 104A001～006 105A001～006 106A001～006 107A001～006）を中心に大蔵経典が数多く存在する。また大正新脩大蔵経一二巻（044A018）と『山家學報　第二號　恵心僧都記念號』（資料番号051A016）も所蔵されている。

四．「銀の匙」に描かれた「救済」

（一）源信の思想「厭離穢土・欣求浄土」

源信の「往生要集」の根本思想は、その冒頭で「一には厭離穢土、二には欣求浄土、三には極楽の証拠、四には正修念仏、五には助念の方法、六には別時念仏、七には念仏の利益、八には念仏の証拠、九には往生の諸業、十には問答料簡なり」と「十門」が挙げられた。「厭離穢土」とは「汚れた世界を厭い離れるべきこと」であり穢土即ち「迷いの領域」を「一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天」とし、「特に地獄の解説が、歴史的に有名である」と中村元は『往生要集』（岩波書店　昭和五八年五月一〇日）において解説する。

「欣求浄土」とは[註8]『岩波仏教辞典第二版』によると「極楽浄土に生まれることを願い求めること」であり、「厭離穢土の自覚が欣求浄土の前提となること」が示唆されている。

大正三年に横川恵心堂で描かれた「銀の匙」後篇が収められた[註9]『銀の匙』（仮綴じ本）における該当箇所を次に挙げる。

後篇七において、兄に釣り堀に連れていかれた帰途の場面、

その時の不愉快と不平……のなかに唯そればかりの命と夕べの空に一つ二つ白々と輝きはじめる星、それは伯母さんが神様や仏様のおいでる所だと教へたその星に嬉しく懐かしく見とれてゐれば、兄は私のおくれるのに腹を立てて

「何をぐづぐづしてる」

といふ。はつと気がついて

「お星さまを見てたんです」

といふのを皆までいはせず

「馬鹿。星つていへ」

と一喝をくはす。あの清らかな天の笑顔は私に母よりもやさしく見える。憐れなる人よ。何かの縁あって地獄の道づれとなつたこの人を兄さんと呼ぶ様に、何の罪もない子供の憧憬が、空をめぐる冷たい石をお星さまと名に呼ぶのがそんなに悪いことであつたであらうか。

「憐れなる人よ。何かの縁あって地獄の道づれとなつたこの人を兄さんと呼ぶ様に、何の罪もない子供の憧憬が、空をめぐる冷たい石をお星さまと名に呼ぶのがそんなに悪いことであつたであらうか」という引用末尾は、「私」を擁護する大人の視点が認められる。「地獄の道づれ」と釣り堀行きの同行と兄弟の縁をもって人生を送ることを二重に比喩する中で、「星」を「神様や仏様のおいでなる所」「清らかな天の笑顔」と憧憬する一方で、人間の世を「地獄」と見なす厭世感が伺えよう。

（二）「銀の匙」に描かれた念仏の功徳

前篇から既に伯母さんは念仏者として登場する。前篇十七の寝間における行燈の燈火の場面で「油の中へ羽虫の死骸が真黒に沈んでいる」のを処理する際に「焼け死んだ虫たちの後生の為にお念仏を申す」と虫の魂を想う篤い仏性の持ち主として描かれた。

前篇三十四で、小学校入学を拒む「私」が兄に頬、をはられた上、仏様のお供物を食べ発熱した場面では。「伯母さんは念仏を繰り返しつつ夜の目もねずに看病してくれた」と他力本願で病気平癒を願う姿が描写される。

後篇十六、蚕の飼育の場面で、孵った蚕種の半分が裏庭に捨てられた。それを憐れむ「私」に対し、「仏性の伯母さんはどうぞしたいのは山々なのだけれどどうしようもないものでお念仏をくり返しつつやうやく賺して連れ帰つた」とままならないことに対する無念さを念仏で昇華させる描写がある。

後篇三十五、故郷に戻り身体を弱らせた伯母さんを「今生の暇乞ひのつもり」で尋ねた場面では、「お阿弥陀様に御礼を申上る」といって仏壇前に座り伯母さんが読経する姿が描写される。「そののち程なく亡くなつた。死に際にはひどく苦しんだのを菩提所の和尚様が深切に見舞つて枕元で法華経を読んでくれたらば忘れたやうに楽になつて、お念仏を繰り返しつつやすやすと息をひきとつたといふ。伯母さんはながいこと夢みてゐたお阿弥陀様の前に坐つて、あの晩のやうな敬虔な様子で御礼を申上げてゐるのであらう。」と、伯母さんの念仏による往生を願う温かな視点で描かれた。

二（一）⑤の関口論では、原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解が指摘されたが、この伯母さんの臨終場面からは「朝題目夕念仏」という[註10]「朝には法華経を読み、夕方は念仏を唱える」天台宗の勤行の様子と共に、天台教学における[註11]「称念」即ち「仏に見えることを目的とする念仏」、「仏の真理そのものを観察するものや仏の形相・世界を観察するもの」を伯母さんが志向していたことが分かる。浄土門というより天台門の影響下と考えられる。

（三）「救済」の縁にもれた「私」

後篇二十六～三十は近所に越してきた独逸人の宣教師夫婦とその通訳の女性皆川さんと「私」との関わりが中心となる。皆川さんとのやり取りで「救い」を求める場面は次の通りである。

「僕――神様が――救はれるかしらん」といつた。彼方は一寸合点のゆかぬ様子をしたが「ええ、ええ、神様はどなたでも救って下さいます。だけどあなたどうしてそんな――」私はさつと耳朶まで赤くなつて足をぶらぶらさせたりおるがんをそつと鳴らしたりしてごまかしながら「僕――悲しいことがあるから」皆川さんは愈驚いてもしや生意気からそんなことをいつてみるのぢやないかと半信半疑の様子ゆゑ私は熱心に繰返し繰返ししてやつとそれが本当の心からだといふことを呑みこませそして今度のくりすますには必ず一緒に教会へゆくといふ約束をして帰つたがそんなこといつたらどんなに叱られるかと思ひ殊に自分の願ひが真面目であるだけなほさらいひ出しかねてとうとうその日までもとつおいつ思案はしながら誰にも話さずにしまつた。（後篇二十八　傍線筆者）

結果的にクリスマス当日兄から詰問され行かれなくなった「私」は、宣教師一家の転居を知り「異人さんにもよく申訳をして出来ることならどうぞして信者になりたいと思つてゐたのに。唯一の頼みの綱もふつつりと切れてしまつた」と、悲しい気持ちをどうにかしたい、救われたいと思う気持ちはあるものの、縁に与れなかった様子が描写された。

また後篇三十七において友達の別荘で一夏を過ごした際に、世話

をしてくれた婆さんとの会話では主人公が仏縁の深さにもかかわらず出家の縁に与れない理由が次にように示された。

ばあやは私を一目見て
「ああ御仏縁の深い方だにお坊様におなり遊ばいたらよかつたになあ」
と思つたといふ。（中略）
私は仏縁は深いけれど人が邪魔したため坊さんにもなれずこれからも邪魔されるといふので
「それぢや仏縁が深くても駄目かなあ」
と嘆息するやうにいへばま顔になつて
「なにあんたそれだてこれから一心に御信心なされれば、あんた仏様の力は広大だでなあ」
と何もかも忘れて力をこめた。そして
「わしらとちがつて目がお見えになるでお経文をお読みなされ」
といひながら手の筋を見て
「小さな邪魔の筋はみんな消えとりますがな」
「もうはいちやんと本願を頂いておいでだにちつとばかりの自力をお棄てなさらいで、あんたは悪いお方だなもや」（傍線筆者）

傍線部は、浄土三部経に示される阿弥陀如来の「本願」つまり[註12]「阿弥陀如来がすべての衆生を済度するという本願を立てられたからには、われわれは、それを絶対的に信じることで救われる。小さな自力の計らいは捨てなさい」という浄土真宗的教義が説明された。

五．原始仏教の死生観

（一）中が受容した仏教書に現れた思想

中が『提婆達多』初版本の末尾に参考諸書の一つに挙げた[註13]『オルデンベルグ氏　仏陀』では、舎利弗の言葉として「我れは死を欲せず、又生を欲せず。我れは時の来るを待つこと猶ほ其賃金を待てる奴隷の如し。我れは生を欲せず、我れ死を欲せず。我れは時の来る迄、覚醒、留意して待たん」との言葉が掲載されている。また続いて、無常の存在として地上の執着を離れた場合、「若し今疾く現世を辞せんと欲せば之をなすも可なり。大多数の者は自然が其目的点に達するまで現世に留まるなり」という舎利弗の言葉も同所には記されている。

同書及び同箇所を中が受容したことは、「私は死を望んではゐない。生を望んでもゐない。私が心から望むのは「私」が存在しなかったことである」（大正十二年六月某日「沼のほとり」『思想』大正一三年一月号初出）との箴言の冒頭二文章に引用されていることから明らかである。

また中が初版本の末尾に参考諸書の一つに挙げた[註14]『ケルン氏仏教大綱』の「第三編　仏の教法」には「聖者の目的は涅槃に達するにある。（中略）実際涅槃と云ふは再生の恐れのない幸福なる死滅の意である。若し然りとすれば仏は魔羅に勝つたと云ふことが如何してできるか。之は仏は実際有形の死に勝つたのではなくして卑しむべき死の恐怖に勝つたからである。この結果に達する手段は死を極めて多幸なるものとして示すにある」と記されている。

つまり、原始仏教における死生観は、無常の現世への執着と苦悩を絶ち涅槃に入ることを第一義とし、悟りの状態では生死の別を殊更意識しないことである。その上で「若し今疾く現世を辞せんと欲せば之をなすも可なり」と舎利弗は自殺を容認している。それは、『ケルン氏　仏教大綱』によると「鍛工は米飯菓子豚肉の食事を準備した。世尊来つて座に着かるるや自ら豚肉を取り弟子等には他の食物を薦められた。供養の後世尊は准陀に豚肉の残りは埋めて貰ひたいと仰せられた、是れ斯る食物はこの世で世尊のほか何人も食ひこなすことの出来ぬからである。この後間もなく世尊は激烈なる赤痢病に罹られた」と仏陀の最期が意図的に毒を食した結果であると説かれるからである。

（二）源信（恵心僧都）の思想との相違点

自殺者に対する位置づけが、原始仏教と源信の思想では大きく異なる。

先述した通り、悟りを開き死の恐怖に勝ったものには生死の別は関係なく、他を利するためには自死もやむを得ないとする考えである。

それに対し『往生要集』上巻には「間違った見解、思想によって」自殺した者が落ちる「等喚受苦処」地獄が次の様に描かれた。

復有異処、名等喚受苦処、謂挙在嶮岸無量由旬、熱炎黒縄束縛、繫已、然後推之、堕利鉄刀熱地之上、鉄炎牙狗之所噉食、一切身分、分分分離、唱声叫喚、無有救者、昔説法依悪見論、一切不実、不顧一切、投岸自殺者、堕此、

石田瑞麿による書き下しは「また異処あり。等喚受苦処と名づく。謂く、嶮しき岸の無量由旬なるに挙げ在き、熱炎の黒縄にて束ね縛り、繫ぎ已りて、しかして後にこれを推して、利き鉄刀の熱地の上に堕す。鉄炎の牙の狗に噉み食はれ、一切の身分、分分に分離す。声を唱へて叫え喚へども、救ふ者あることなし。昔、法を説くに悪見の論に依り、一切不実にして一切、岸に投げて自殺せるを顧みざる者、ここに堕つ」である。

源信の思想において、地獄が人間の犯した罪によって諸相あることに関し、中村は[註15]「特に源信の属していた天台宗の教義によると、地獄は人間を離れてあるものではなくて、人間の一つの側面なのである。地獄の描写のうちに人間の諸相を見出したのも、極めて当然のことであった」と解説する。塩入法道は、「天台が説く心」（『大法輪』平成二〇年五月）において「天台止観」を「本来、日常のあらゆる場面で、カッとなる心、欲望にもえる心、ふと和む心、その瞬間の心をとらえて行われる修行法」であり、「どちらの心も私でしかないということを悟って、懺悔し、それが私の心に具わっている菩薩や仏にまで自己を高めていこうとすること」が「中道観」であると示した。このように天台大師智頭の著した『摩訶止観』という人間の心のあり様を追究した書に著された[註16]「地獄も餓鬼も畜生も、あるいは仏も菩薩も、衆生の一瞬一瞬の心にある」という天台思想がその根本にある。

六．『提婆達多』に描かれた救済

（一）悉達多の説法

二（一）⑬の堀部論において指摘された山辺による『仏弟子伝』、他に中が初版本末尾に参考諸書の一つに挙げた[註17]『釈尊之生涯及其教理』等単行本を典拠とする説法を一覧とすると、次頁の表1の通りである。

中自身、先掲の和辻照子宛書簡「色々不満なところもありますが特に仏陀の説法に関して随分物足らなく思つてゐます。併し説法を創作する気にもなりませんでしたから致し方ありません」と気のないことを告白している。それは典拠本の影響が強いことから、その言説は裏づけられる。

（二）提婆達多の説法

後篇八に千五百余りの比丘衆に対する提婆達多の説法が次のように描写された。

（前略）私は汝等を憐んで微妙の法を説く。然るに汝等愚痴の者よ、汝等は耳聾して鼓の声をきかず、目盲ひて慧日の光を見ず、罪業の淤泥にまみれ、淫楽の悪臭をはなちつつ蛆のごとくに人界を匍匐ひまはる。汝等は猿のごとくに交尾み、猿のごとくに生み、猿のごとくに群居する。而して色慾の肉縄につながれたる互を夫とよび、妻とよび、親とよび、子とよぶ。汝等は五欲の糧を得んがために媚び、諂ひ、匿し、偽り、欺き、誑し、謗り、罵り、憎み、嫉み、悲み、怒り、吝み、貪り、盗み、殺し、……ありとある罪悪を犯す。汝等の愛欲に皺める顔はさらに狡智に歪む。汝等はまことに猿よりも醜悪に、猿よりも奸悪である。汝等我唾を啗ふにも足らざる奴輩よ、汝等は生死に輪廻してやまぬであらう。汝等はまさに畜生道に堕ちるであらう。汝等は餓鬼道に堕ちるであらう。汝等は大紅蓮の氷に凍え、大焦熱の焔に焼かれ、阿鼻の底に叫喚しつつその時はじめて私を思ふであらう……（傍線筆者）

前半の「色慾」に関する説法は、後篇九から二十八までの阿闍多設咄路王の挿話における、王が提婆達多から影響を受けた思想内容である。後半の傍線部は、まさに源信の『往生要集』冒頭に描かれた「厭離穢土」の次の箇所を典拠としていることが分かる。

大文第一、厭離穢土者、夫三界無安、最可厭離、今明其相、惣有七種、一地獄、二餓鬼、三畜生、四阿修羅、五人、六天、七惣結（傍線筆者）

七、大焦熱地獄者、在焦熱下、縦広同前、苦相亦同（大論瑜伽論）但前）六地獄根本別処一切諸苦、十倍具受、不可具説、其寿半中劫、偸盗淫飲酒妄語邪見、并汙浄戒尼之者、堕此中、（中略）有大火聚　其聚挙高五百由旬、其量寛広二百由旬、炎燃燭盛、彼人所作悪業勢力、急擲其身、堕彼火聚、如大山岸推在険岸（己上、正法念経略抄）（傍線筆者）

表1

No.	『提婆達多』章	『提婆達多』本文における表現	出典（『佛弟子伝』『釈尊の生涯及其教理』）の引用頁	出典における表現
①	前篇三十	寂静にして知足なるは楽し 諸法を観察するは楽し 世間を悩まさず能く衆生を慈むは 一切の慾を離れ恩愛を棄つるは楽し 能く我慢を伏するは是れ最上の楽なり	『佛弟子伝』 「第五　舎利弗」 「第二章帰仏」 五五頁	諸聖を見るや楽し 共に居るのも復楽し 諸の癡輩を見ず 是ぞ常楽なれ。
②	前篇三十一	憍陳如、お前たち心をとめて聴け。五蘊の苦、生老病死の苦、愛別離苦、怨憎会苦、求むるところを得ざる苦、栄楽を失ふの苦、憍陳如よ、有形、無形、無足、一足、二足、四足、多足、一切の衆生は悉く此の如き苦のないものはない。これらの諸の苦は我こを本として生ずる。貪慾、瞋恚、愚痴は皆我を本として生ずる。この三毒は是諸苦の因である。種子の萌芽を生ずるが如く衆生は之がために三界に輪廻するのである。もし我想及貪瞋痴を滅すれば諸の苦も亦それに従つて断ずるのである。もしさうならうと思ふならばかの八正道に由るのほかはない。一切の衆生諸苦の根本を知らぬものは皆悉く生死に輪廻するのである。憍陳如よ、苦応に知るべく、集答に断ずべく、滅応に證すべく、道当に修すべし。憍陳如よ、私は已に苦を知り、集を断じ、滅を證し、道を修したるが故に阿㝹多羅三貌三菩提を得たのである。それ故にお前も今当に苦を知り、集を断じ、滅を證し、道を修せねばならぬ。もし人苦集滅道の四聖諦を知らぬときはその人は解脱を得ることはできぬ。四聖諦は是真是実、苦は実に是苦、集は実に是集、滅は実に是滅、道は実に是道である。憍陳如よ、お前たちは了解したかどうか	『佛弟子伝』 「第一　五比丘」 四頁 『佛弟子伝』 「第五　舎利弗」 「第二章帰仏」 五四頁	五比丘よ、出家の人として、二種の近づいてはならぬものがある。一は世欲に執著する者、他は邪道を修むるものである。耽欲の凡夫は、下劣な欲楽に心を奪はれて長く輪廻の暗に沈み、邪の苦行を修むる者は、愚痴の為めに、徒らに身を苦めて心の光を覆ひ、暗より暗に入る。比丘よ、我はいまこの二邊を離れて中道に憩つてをる。心は諸の穢を除き、暗を拂うて安穏である。汝等、苦集滅道の四諦により迷悟の因果を知り、正見、正業、正悟、正行、正命、正方便、正念、正定の八正見によりて正しい思惟修道に進むがよい。 人は皆「我」を執じて、輪廻の源造つてをる。若し「我」想と、「我」の目的となるべき我所を除き去つたならば、寂然日光の暗を拂ふやうに、心の開明を見るであらう。
③	前篇三十二	比丘たちよ、一切のものは皆燃える。さらば一切のものが燃えるとはなにか。比丘たちよ。眼は燃える。色は燃える。眼識は燃える。眼触は燃える。眼触に因つて生ずるところの受も亦燃える。苦も燃える。楽も燃える。非苦も非楽も燃える。一切のものは皆悉く燃える。それはなんの火によつて燃えるか。貪、瞋、痴、三毒の火によつて燃えるのである。生、老、病、死、愁憂、苦悩の火によつて燃えるのである。眼、耳、鼻、舌、身、意、色、声、香、味、触、法は皆悉く燃える。聖弟子如是の法を聞けばこれらのものを厭離して染著なく、便ち解脱を得、解脱の智生じ、所作已弁じ、梵行已に立てば復世間に転生することはないのである	『佛弟子伝』 「第四　三迦葉」 三二〇～三三頁	比丘よ、一切のものは皆燃えてゐる。眼も燃え色（事物）も燃え、眼識も燃えてゐる。眼が外界の事物を見て心の内に苦楽の感覚を起さしめると、この感覚は貪瞋痴の炎を煽り、生老病死、愁憂苦悩の火を盛んならしめる。然るに清浄に行を修める眞の仏弟子は、欲火の根本たる内心の火を滅する為めに、外界の火はもや内心を焼くことは出来ぬ。ここに眞の智慧は護られることである。されば汝等は神通と思惟と教によりて道を修め、従来の儀式、供犠等をなすことは要らぬ。
④	前篇三十三	我師の説くところ 法は縁によりて生ず また縁によりて滅す 一切の諸法は 空にして主あることなし	『佛弟子伝』 「第五　舎利弗」 「第二章帰仏」 五四頁	諸法は因縁より生ずと 世尊は説き給へり。 諸法を断じて涅槃に入ることも 大沙門は宣説し給ふ。
⑤	前篇三十三	諸の悪はなす莫れ 諸の善は奉行せよ 自らその意を浄くする これ諸仏の教なり	『佛弟子伝』 「第五　舎利弗」 「第二章帰仏」 五八頁	諸の悪を作さず、 諸の善を行ひ 自ら心を浄くするぞ 諸仏の教なれ。
⑥	前篇四十一	起てよ　逡ふこと莫れ　浄く梵行を修せよ　快く善法を習へば　今世後世安楽に住す 浄く梵行を修せよ　慎んで悪法を行ふこと莫れ　快く善法を習へば　今世後世安楽に住す	『釈尊の生涯及其教理』 「成道後の説法より入滅迄」 八四～八五頁	起きよ、怠るなかれ、 正しくして、光明ある生活に入れよ、 徳に従ふ人は、 今生後生共に幸福を得ん。 正しき生活に従ひて、 悪しき生活を退けよ。 徳に従ふ人は、 今生後生共に幸福を得ん。

八、阿鼻地獄者、在大焦熱之下欲界最低之処、罪人趣向彼時、先中有位、啼哭説偈言、一切唯火炎、遍空無中間、四方及四維、地界無空処、一切地界処、悪人皆遍満、我今無所帰、孤独無同伴、在悪処闇中、人大火炎聚、我於虚空中、不見日月星、時閻羅人以瞋怒心答曰、或増劫或減劫、大火焼汝身、癡人已作悪、今何用生悔、非是天修羅、健達婆竜鬼、業羅所繫縛、無人能救汝、如於大海中、唯取一掬水、此苦如一掬、後苦如大海、既呵責已、将向地獄、去彼二万五千由旬、聞彼地獄啼哭之声、十倍悶絶、頭面在下、足在於上、遥二千年、皆向下行（正法念経略抄）（傍線筆者）

また紅蓮地獄とは「大毘婆沙論」では八寒地獄中の第七。鉢特摩（はどま）は深紅の蓮華を意味するサンスクリット語の音写。ここに落ちた者は酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るという（前出『岩波　仏教辞典　第二版』による）。

以上のように、中は後世、玄奘が編んだ「大毘婆沙論」や源信が撰述した『往生要集』に描かれた地獄道、餓鬼道、畜生道のイメージを提婆達多の説法には利用している。原始仏教時代ではありえない説法内容であるが、仏陀の説法を創作する気がなかった分、提婆達多の説法には中が受容した源信の思想の影響が認められる。

（三）ダンテ『神曲』の影響

「まことに耶輸陀羅は彼（筆者注　提婆達多）が真実の心を捧げ得たる最初のものであった。そして最後のものとなるであらう」（前篇　四十一）と耶輸陀羅臨終の場面で、提婆達多にとっての「真実の心を捧げ」た唯一の女性としての耶輸陀羅の存在を中は印象付けている。

二（一）⑰の拙稿で検証したように、手沢本の書入れ箇所との照合により中は耶輸陀羅の描写に苦心していた。このような耶輸陀羅造型には、中が受容した安倍による「山中雑記」中、ダンテ『神曲』の影響を認められよう。

『提婆達多』上梓の大正一〇年は[註18]「ダンテ没後六〇〇年に当たり、日本における学究的なダンテ研究の一つの頂点をなす黒田正利『ダンテとその時代』が現れた」と解説されるように文芸雑誌がダンテ特集号を組むような、ダンテ顕彰年であった。

「山中雑記」に記された「往生要集の地獄は寄せ集め物である上に、感覚描写があるばかりで、一つもポエトリーがない。ダンテの地獄などとその点が違ふ」との安倍の友人の評価は、『往生要集』巻頭の「夫往生極楽之教行、濁世末代之目足也、道俗貴賤、誰不帰者、但顕密教法、其文非一、事理業因、其行惟多、利智精進之人、未為難、如予頑魯之者、豈敢矣、是故依念仏一門、聊集経論要文　坡之修之、易覚易行」（傍線筆者）の部分を読み[註19]「濁り汚れた末世では（念仏の教えにたよるのでなければ凡夫は救われない）という趣旨によって、諸々の経典の文句を集めた」という同書成立の趣意を理解していたと言えよう。経典に対する深い関心とダンテ『神曲』のポエトリーを評価できる安倍の友人を推測するならば、「山中雑記」には名前こそ現れないが、共に恵心堂で一夏を過ごした中と考えられよう。

ダンテにおける唯一の女性とは、ダンテ9歳並びに18歳で出会い、23歳で没したベアトリーチェである。

表2

①	②	③	④	⑤	⑥
前篇九	前篇一八	前篇三七	後篇一	後篇三	後篇四
提婆達多は地獄の苦悩をうけた。彼は殆ど凶暴な狩猟に気をまぎらさうとしたが何のかひもなかつた。さしもに強い彼の肉体も身心の過度の試練に疲れはてた。彼は眠ることも食ふことも出来なかつた。彼の頭には絶えず一つ事が水車のやうに廻つてゐた。（中略）そしてそれはさながら同じ事実が眼前に繰返されるかのごとく彼にまざまざと同じ苦痛、憤怒、憎悪、嫉妬を喚起した。	提婆達多は息のつまるやうな妬に苦みながらさりげない笑顔をつくつてきいてゐる。（中略）提婆達多は煮えかへる胸のうちに、それがあだかも悉達多が謀つて殊更彼をかやうな地位において、彼女をとほして自分の幸福をひけらかすかのやうに悉達多に対して烈しい憎悪を感じた。「よしよし今のうちはどうなりとするがよい。併し総勘定の時には何もかも綺麗に返してやるぞ」さう思へばこの地獄の苦みも結句かへつて一種の張合となつた。	彼は大きな杯から葡萄酒をぐつと飲んで、卓をへだてて向き合つてゐる提婆達多のうへに充血したけだるさうな眼をすゑながら　のゆるんだ高調子で話しかけた。（中略）「なに獅子の卵。これはまた一段と面白い趣向ぢや。獅子の卵に孔雀の舌料理では流石の仏陀も眼をまはされるであらう」	提婆達多が耶輸陀羅に対する怨恨は深かつた。彼はいはば罪によつて浄められた。姦淫によつて蘇つた。	提婆達多は夢寝にも復讐を忘れなかったけれども終に乗ずべき機会を得ずに隠忍して年月をへるうち、いつとはなしに折々生きながらの地獄ともいふべき自分の生活にひきくらべて、仏陀の澄明平穏な精神生活を我にもあらず羨望する気持になるやうになつた。（中略）彼はいかに他人の受けた一鉢の美食、一枚の新衣を妬んだか。いかにまた尼僧に対して劣情をおこし、みめよき女の門を立ち去りかねたか。	かやうにして「尊者提婆達多の名が高まるとともに彼の驕慢は忽に増長した。彼は仏陀が彼を大弟子たちの下におき、彼らもまた彼をあまり高く評価しないのを安からぬことに思つた。そして終にいかにもし己れ覇者たらんとの願望を抱くやうになつた。

耶輸陀羅は、後篇提婆達多の心身が末期の苦しみに苛まれても「私は決して悉達多にひとり勝利者の日を楽ませはせぬ」と悉達多殺害の企てをもって告別の度に出る際に現れる。

「提婆達多」

提婆達多はよろよろとした。そして死人のやうな顔をして何物かを捜すやうに庵室のなかを凝視した。彼は悄然として轎にのせられた。それは忘れもせぬ耶輸陀羅の声であつた。

死してもなお提婆達多に寄り添い導こうとする至高の存在として耶輸陀羅は描かれる。それはダンテ『神曲』において地獄・煉獄を巡るダンテを守護する「恵みを与える女性」ベアトリーチェと重なる。

図1　ダンテ・アリギエリ著・原基晶訳、『神曲　地獄篇』、講談社学術文庫、平成二六年六月一〇日、五四六頁

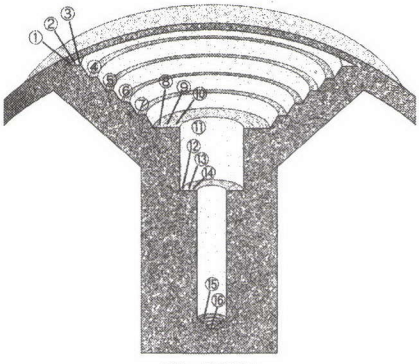

図3　地獄全図

①地獄門
②前地獄、日和見主義者
③アケローン
④第一圏、リンボ、正しく生きたが洗礼を受けなかった者達
⑤第二圏、淫乱
⑥第三圏、飽食
⑦第四圏、貪欲
⑧第五圏、怒りと怠惰
⑨ディース城
⑩第六圏、異端者
⑪第七圏、暴力者
⑫第一小圏、暴君、殺人者、強盗
⑬第二小圏、自殺、家産浪費
⑭第三小圏、神を罵った者、同性愛者、銀行家
⑮第八圏、マレボルジェ、他人を欺いた者
⑯第九圏、コキュートス、裏切り者

（アレッサンドロ・ヴェッルテッロの地獄全図等を参考に作成）

図2　ダンテ・アリギエリ著・原基晶訳、『神曲　煉獄編』、講談社学術文庫、平成二六年七月一〇日、五六三頁

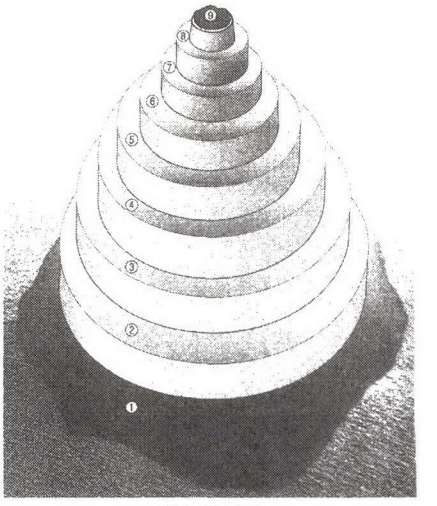

図3　煉獄全図

①前煉獄　破門者（今際の際まで悔悛しなかった者等）
②第一環道　高慢
③第二環道　嫉妬
④第三環道　憤怒
⑤第四環道　怠惰
⑥第五環道　貪欲（吝嗇と浪費）
⑦第六環道　飽食
⑧第七環道　淫乱
⑨地上楽園

中にとっての山田が「本質の善い所」を「より良く見て居た」という親友であったことが、耶輸陀羅と提婆達多の関係性に反映していると言えよう。

さらに中がダンテ『神曲』を『提婆達多』の典拠と判断する要因として、表2の通り、提婆達多の想念としての地獄の描写に因る。

傍線部は図1・図2の通りダンテ『神曲』の地獄めぐり・煉獄めぐりのテーマである「暴食」「色欲」「傲慢」「怠惰」「嫉妬」「強欲」という七つの大罪と重なる。

七．おわりに

二（二）①で挙げた「銀の匙」から『提婆達多』への連続性や発展性に関し、「銀の匙」後篇が比叡山横川の恵心堂で執筆された思想的影響が両者に認められた。前者の後篇三十五、天台門下の「朝題目夕念仏」勤行と「称念」による伯母さんの往生について、好意的ではあるが前時代的なものとして描かれた。また主人公は、気の合わない兄を「地獄の道連れ」と評する「厭離穢土」の思想と、「神様や仏様のおいでなる所」「清らかな天の笑顔」に憧憬する「欣求浄土」の心を持ちながらも、後篇三十七に登場する伯母さんを髣髴とさせる老婆から、阿弥陀如来の「本願」に任せず「ちつとばかりの自力」を捨てないことが出家の障りであると諭される、救いを求めても自我へのこだわりを捨てきれない人物として造型される。この主人公像は後者の「仏陀の澄明平穏な精神生活を我にもあらず羨望する気持ち」を持つ一方で「己」が生み出す「生きながらの地獄」に身を沈める「提婆達多」像に繋がっている。

二（一）⑤の関口論で示された中による原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解は、本論によって、阿弥陀如来の「本願」等浄土真宗教学が含まれるものの、大まかには天台門であることが判明した。また具体的に中が受容した源信（恵心僧都）の思想について、『往生要集』における「厭離穢土・欣求浄土」「念仏の功徳」であることが分かる。特に『往生要集』大文第八「念仏証拠門」の偈文「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」の出典を観無量寿経に遡ることによって、『提婆達多』後篇の阿闍多設咄路王の話に至るこ

とから、『提婆達多』成立に果たした役割は大きい。

二（一）③⑤⑮で示唆された提婆達多の「地獄」のイメージであるが、仏経典や教本では『往生要集』「大毘婆沙論」、ダンテの『神曲』における地獄のイメージに典拠する。

中の青年期は山田又吉の卒業論文「エックハルト研究」が示すように西洋哲学やダンテ『神曲』に現れたヨーロッパ中世期の思想が日本に大きな影響を与えた。そこから考慮すると中が天台宗や浄土真宗など既存の日本の仏教宗派に限定された思想や原始仏教思想の影響を受けたことは極めてまれな状況であったと言える。

一見すると、原始仏教に触れた結果が反映しない状況だが、創作できなかった仏陀の説教に対し、原始仏教を離れて自由に提婆達多を創作する態度の表れと見られる。

五（一）で示したように「私は死を望んではゐない。生を望んでもゐない。私が心から望むのは「私」が存在しなかったことである」と深い厭世観を抱いていた中は、西洋思想の限界を理解していた。原始仏教に中は自分が救われる可能性を信じ、仏陀在世期の諸経典や関係諸書を受容したと考えられよう。

後記

本稿執筆に当たり、大正大学図書館長、天台学研究室の塩入法道教授に天台教学についてご指導いただいたことについてここに深謝申し上げます。

註

1 「私の処女出版」『東京新聞』、昭和三〇年一月三〇日
2 山村光敏編集、比叡山学会出版、昭和一二年三月一五日
3 『心』、生成会、昭和四〇年七月
4 「古国の詩」『中勘助全集』一二巻、角川書店、昭和三八年一二月二五日
5 『思潮』二巻一〇号、岩波書店、大正七年一〇月一日初出、後に『安倍能成選集』一巻、小山書店、昭和二三年四月二五日
6 大正七年五月二二日付和辻哲郎より妻照子宛書簡に「今日朝博物館の入り口でバッタリ中さんに遇った。明日の朝は中さんに逢ひに行かうと思ふ。（後略）」と中と奈良国立博物館で偶然会ったことが報告された。
7 岩波書店　昭和四一年
8 中村元他四名編、岩波書店、平成一四年一二月
9 岩波書店　大正一〇年
10 「天台宗における『勤行』について」『天台宗檀信徒勤行経典』、比叡山延暦寺校閲、日本仏教普及会、平成七年一月三〇日
11 木越康・山田恵文、「知っておきたい浄土真宗の基礎知識」『大法輪』、平成二四年五月、九一頁
12 平成二七年一月二七日付木内宛書簡における大正大学 図書館長 天台教学研究室 塩入法道教授のご教示による
13 オイデンベルグ著・三並良訳、梁江堂、明治四三年一二月
14 ケルン著・立花俊道訳・南條文雄校閲、東亜堂、大正三年八月
15 中村元、『往生要集』、岩波書店、昭和五八年五月
16 註12と同じ、塩入教授のご教示による
17 リス、デキズ著・文学博士南條文雄序文・赤沼智善訳、無我山房、明治四四年九月一五日
18 日本近代文学館・小田切進編、『日本近代文学大事典』第四巻、講談社、昭和五二年一一月一八日、三五〇頁
19 註15の中村元の著作に同じ